

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | アフマートヴァとツヴェターエヴァ : 連作第六部  |
| Author(s)     | 武藤, 洋二  |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 73 p.37-p.51   |
| Issue Date    | 1987-03-25  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/81139">https://hdl.handle.net/11094/81139</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## アフマートヴァとツヴェターエヴァ 連作第六部

武 藤 洋 二

АХМАТОВА И ЦВЕТАЕВА

МУТО Ёдзи

### Содержание

1. “Я в праве не быть своим собственным современником.”
2. “Доживать — доживать. Горькую полынь”
3. “Да разве вы не понимаете, что все кончено.”
4. “....сунула голову в петлю, как под подушку.”

### Примечания.

### 1

マリナ・ツヴェターエヴァは、1941年8月31日タタール自治共和国エラープガで自殺した。

革命前のツヴェターエヴァの生活は、童話のように幸福であった。十八才で詩集『夕べのアルバム』(1910年)を、二十才で『魔法の灯り』(1912年)を出版する。

若い詩人は、自分の家庭生活に酔っていた。彼女は、「まれにみる高貴な美男で、姿も心もすてきな」<sup>(1)</sup> 若者と結婚しており、アリアードナという一才の娘がいた。夫セルゲイ・エフローンは、彼女にとって単なる配偶者ではなく、唯一者であった。

「セリョージヤを私は果てしなく、そして、永久に愛します。」<sup>(2)</sup>

二十一才の時のこの熱情を彼女は生涯もちつづける。

「私たちは決して別れません。私たちの出会いは奇跡です。」<sup>(3)</sup>

四人の男と短期間に別れたアフマートヴァとは対照的に、ツヴェターエヴァは、夫セルゲイの運命に忠実に従った。十月革命から独ソ戦までの政治は、セルゲイを通して彼女にのしかかっていた。夫は、肺を患ったことがあり、少しのことで熱をだす病弱で鋭敏な青年である。彼の不安定な健康状態は、ツヴェターエヴァの重荷の一つになる。「奇跡」としての二人の結びつきは、彼女

から詩作の力をうばっていくことになる。

高揚した愛の言葉から三年半たって、十月革命が起った。夫は白軍に加わり、行方不明になった。国中が飢え、寒さにふるえていた1920年2月、二才の次女イリーナが餓死した。

「首をつったほうがましだ。」<sup>(4)</sup>

これは、その後、災いがつもりつもって、二十一年後に実行される。

反革命軍は敗れ、夫はクルミヤからガリポリへと国外脱出した。ブラハのカレル大学の学生になった夫のあとを追って、ツヴェターエヴァは、1922年5月11日モスクワを立った。ベルリンを経て、一家はチェコスロヴァキヤにおちついた。

亡命地でもまた、貧困と家事とが詩人を疲れさせ傷つけ、主力を詩に余力を他事に使う詩人としての生活はむづかしくなり、力と時間の配分は逆転してしまう。自分は、まるで『罪と罰』の女主人公ソーニヤの母親だとツヴェターエヴァは思う。<sup>(5)</sup>

しかし、ツヴェターエヴァは、まだ押しつぶされない。

「詩は、もちろん、できるでしょう、さもないければ、私の生活は私のものでなくなり、私は私でなくなるのです。」<sup>(6)</sup>

この後半は、極めて正確である。彼女はこのとおりに生きようとして生きられず、自決することによって、この予言の正しさを立証した。ツヴェターエヴァの後半生は、この「さもないければ」が現実になっていく過程である。

生活のきびしさからツヴェターエヴァは、1925年フランスへ移住した。彼女は、アフマートヴァが亡命するらしいといううさをきく。「おもいきっていらっしやい」と、崇拜する詩人へ書き、パリでの受入れの準備をし、駅に出むかえると手紙で約束した。<sup>(7)</sup>

アフマートヴァは、すでに1917年秋に亡命拒否の詩<sup>(8)</sup>を書いていた。ツヴェターエヴァが亡命して二ヵ月たった1922年7月には、祖国の大地をすてた者、それを敵のなすがままにまかせた者とは仲間にならないと、詩によって宣言した。<sup>(9)</sup>

アフマートヴァは、1925年から詩の発表を禁じられていた。1926年11月にツヴェターエヴァが亡命するようにすすめたとき、アフマートヴァにはそれを受けいれてもいい理由があった。しかし、彼女は、亡命地で自由に詩を書くことではなく、自分の国で沈黙をよそおいながら詩作することを選ぶ。だから、彼女は、スターリン圧政下で苦しむソヴェト人を「私の民衆」と呼ぶ資格を得る。作品が発表されないアフマートヴァは、民衆にとっては、物理的に密室の詩人であったが、少数の詩的選良に熱愛された詩人は、この沈黙の密室の中で、民衆詩人へ変わっていった。

ツヴェターエヴァは、亡命のおかげで禁令をまぬがれたが、同時に、亡命のおかげで詩的大衆を失った。一にぎりの亡命者のための小さな雑誌が時たま彼女の詩と散文をのせてくれた。才能は正當に評価されず、作品を活字にするのはむづかしかった。

詩の時間を確保するのもむづかしかった。貧困と家事が時間と体力をうばう。夫には定職がなく、そのうえ病気がちである。夫が肺病と肝臓病で療養所に入ることになり、赤十字から二ヵ月間一日

に30フランもらえるが、入院費は一日50フランなので、差額の600フランを工面するため、そしてまた息子の授業料のどこおりをなくすため、自作の朗読会を開いて危機を脱したこともあった。詩を遠ざけていく日常にいらだって、亡命十三年目には、「もし私が死んだら、どうなる。この年月から一体なにが残るだろうか。(なんのために私は生きたのか)」<sup>109</sup>と、自問し、自らおどろく。

この年1935年アフマートヴァは、夫と息子の第一回目の逮捕を経験する。「私の民衆」とのじかのかかわりが始まる。

あなたたちと一緒に私は這いつくばった、  
血まみれの刑吏人形の足もとに。<sup>110</sup>

なぜ人形か。アフマートヴァは、1935年と1938年にスターリンへ息子助命の手紙をさしだした。第一回は独裁者の気まぐれか寛容の凝態か、ききめがあった。二回目は無視された。ひざまづいた相手をアフマートヴァは、人形とよんでいる。独裁者は、自分の息子だけでなく、数しれない息子たち夫たちを「私の民衆」からうばっている。たんなる刑吏ではない。それは、苦しみに無感覚な権力の化物—刑吏人形である。

亡命地にいるツヴェターエヴァには、息子や娘をこの人形にさらわれる心配はない。しかし、ドイツではヒトラーが戦争の準備をしている。スペインでは、内戦を利用して、数年後に始まる大戦の予行演習がおこなわれている。ソヴェトでは、「モスクワ裁判」という政治劇が演じられている。ツヴェターエヴァは、政治にうとく、政治から遠く、自分の時代が気に入らない。

これより数年前、1933年ナチスが政権をにぎった年、彼女は時代を呪う。

「世界は前へ進み、進まなければならない。私はそれを望まない、それが気に入らない。私には自分の同時代人にならない権利がある。なぜなら、グミリヨーフは『私は同時代の生活にたいして慇懃である……』というが、私のほうは同時代にたいして慇懃ではない。それにしきいをまたがせるものか、階段から落としてやるだけだ。」<sup>112</sup>

アフマートヴァは、息子をうばうという同時代の仕打ちにたいして、同時代の核としての「私の民衆」に詩をささげることによってこたえ、同時代人でありつづけることによって詩人でありつづける。ツヴェターエヴァは、同時代人からおりるという不可能事を望む。彼女の呪いにもかかわらず、時代がしきいをまたいで入ってくるところか、一家全員が餌食になる。彼女は、時代への呪いを詩化することによって、詩人として時代とかかわっていくこともできない。時代に負けていく自分にいつかけりをつける仕事が残されているだけである。

ツヴェターエヴァは、しかし、同時代人であることを忌みながら、同時代にたいして無関心ではありえなかった。1938年イギリスとフランスは、ナチスにのっとられたドイツの欲望を満たすために、チェコスロヴァキヤのズデーデン地方をドイツへ贈った。小国を人身御供にしたこの取引は、ミュンヘン協定とよばれる。この協定は、飢えた狼に前菜をだした。食欲を刺激された狼は、次の年チェコスロヴァキヤ全土をのみこんだ。

かつての亡命地、息子の生まれた所チェコスロヴァキヤを、ツヴェターエヴァは、「私の祖国」

と呼び、連作詩をささげた。そのなかに子守り唄がある。昔は、「いいこだ、ねんねしな。ねなきあ、タタールのいぬめにやってしまう」、ドイツでは、「ドイツのこ、ねんねしな。ねなきあ、フンのがにまためにやってしまう」、ところが今じあボヘミヤでは、「ボヘミヤのこ、ねんねしな。ねなきあ、ドイツめのヒトラーどんにやってしまう」、と歌われる。<sup>(13)</sup>

寝てくれない子を恐がらせる鬼としてあげられているのは、かつてヨーロッパを占領し、あらしまわったタタール、フンである。ヒトラーがそれと同列にあつかわれることによって、「タタールのくびき」のようにヨーロッパがナチのくびきに入ることが予言されている。この子守り唄がつくられたとき、そのくびきはすでに始まっていた。この詩は、子守り唄という形をとって、詩人が、気にいらぬ時代の元兇の一人ヒトラーへあびせた呪文である。

ドイツの隣国である亡命地フランスは、おびえていた。ツヴェターエヴァは、だれよりも暗い予感におののいていただろう。その彼女に、もう一方の側から政治の力がおよぼうとしていた。かつて白軍の将校として十月革命をつぶすために戦った夫セルゲイは、亡命地で親ソ分子に変わり、ソヴェトへ帰ることを望むだけでなく、「祖国帰還同盟」で働くようになった。彼は、ツヴェターエヴァの知らないあいだに、ソヴェト諜報機関にやとわれていた。家族をかかえながら、無職で貧しく病弱なセルゲイには、なんらかの脱出口が必要であった。しかし、彼は、自分の見つけた出口から予期しない所へ出るはめになる。

セルゲイは、ソヴェトの大物スパイであるイグナーチイ・レイスを、裏切り者としてスイスで暗殺する仕事に加わり、フランスの官憲からのがれて姿をくらました。<sup>(14)</sup> 残されたツヴェターエヴァは妻として尋問されたが、警察は、彼女が何も知らないのにあきれて釈放した。

セルゲイは、スペインを経てソヴェトに帰国してしまった。父親の影響で親ソ的になっていた娘アリアドナは数ヵ月前に帰国していた。時は、ソヴェトで最も多くの人間が逮捕され、のちのちまで恐怖の年として記憶された1937年である。二人は、亡命地ではぐくんだソヴェトについての幻想と現実との隔絶を身をもって知ることになる。残された息子ゲオルギイも帰国をせがんだ。三人とも、帰国さえすれば、貧しい不安な亡命生活とはちがった素晴らしい新生活が待っていると信じていた。

ツヴェターエヴァは信じなかった。背後にはナチズムの脅威がありながらも、彼女は、ソヴェトに帰りたくなかった。

帰国をめぐるツヴェターエヴァは、家族のなかで完全に孤立した。そして、屈服した。私たちは決して別れないという新婚時代のことばに従った。

## 2

1939年6月18日、ツヴェターエヴァは息子と共にモスクワにもどった。これは、レニングラードでアフマートヴァが息子への差し入れのために十字獄の前にならんでいたときである。

ツヴェターエヴァ一家が家族としてのつながりを保てたのは、二ヵ月だけであった。8月27日娘アリアドナが逮捕された。

「かんたんに云えば、8月27日の夜アーリヤの出立である。アーリヤは、陽気で雄々しくふるまっている。わざと冗談でうけこたえしている。(中略) 別れもつげないで、去っていく。私——アーリヤ、どうしたの、誰れとも別れのあいさつをしないで、そのまま？彼女——涙をうかべている、肩ごしに——手で追うしぐさ！爺さん、ごきげんよう。これでいいのだ。長い見送り——余分な涙。」<sup>(15)</sup>

これが親子の永遠の別れになった。亡命地でありにも苦労をさせたので、この娘は金持のところへお嫁にいかせたい<sup>(16)</sup>とツヴェターエヴァは思っていた。彼女は、娘の逮捕連行の様子をまるで旅立ちのように記録している。それは、極北への旅であった。

「私が目で鉤をさがすようになってから（およそ）もう一年になるのを誰れも分かっていないし、知らない。鉤はない。なぜなら、どこも電燈だから。『シャンデリヤ』などない。」<sup>(17)</sup>

アフマートヴァは、自分の体が鉤にかけられるだろうと歌ったが、ツヴェターエヴァは、自ら鉤にぶらさがろうとしている。ここに二人のちがいが集約されている。

娘の逮捕から一ヵ月半後、10月10日に夫が逮捕された。<sup>(18)</sup>元白軍の将校で、長い亡命生活をおくり、ソヴェト諜報機関の下働きをしたセルゲイは、逮捕されても不思議ではない。暗殺のような秘密の仕事をさせられた者は、原則として消される。「奇跡」としての二人の出会いは、ここで終わった。

妹アナスタシーヤは、すでに1937年にシベリヤへ流されている。

家族が一つになるために帰国したツヴェターエヴァには、息子だけが手元に残された。息子を養うだけでなく、娘と夫への差し入れのためにも、彼女は翻訳の賃仕事にあげくれた。

「私は、雄牛のように翻訳の仕事につながれています。これで丸一日つぶれます。」<sup>(19)</sup>

詩人は翻訳家に変身し、アフマートヴァのいう「自分の脳を喰う」状態になった。

「私の生活は非常に悪い。私の非生活。」<sup>(20)</sup>

自分の生在形態を「非生活」とよんだ1940年8月31日からちょうど一年後に、「鉤」が見つかる。

「幸せであるためには、きわめてわずかのものしか私には必要でなかった。自分の机。身内の者の健康。どんな天気でもよい。完全な自由。——これだけ。」<sup>(21)</sup>

母国で保証されたのは天気だけであった。詩人に必要な机は、物理的にも比喩的にも無かった。食卓で行う仕事は、詩作ではなく、翻訳であった。

「不幸なことには、私には一つも物質がない。あるのは、心と運命だけ。」<sup>(22)</sup>

机すらないすっからかんのくらしのなかで、「心と運命」がせめぎあっている。「運命」と呼ばれている政治情勢が、生活から詩を追いだし、詩人は詩のしほり滓になる。

娘が逮捕されたあと、ツヴェターエヴァは、自分の生活を余生だと感じる。

「余命をつくすことは噛みつくすこと。にがいよもぎを。」<sup>(23)</sup>

これは、彼女のソヴェト生活全体にあてはまる。よもぎを噛みつくのに二年しかかからなかった。

アフマートヴァは、「他人のパンはよもぎのにおいがする」と、亡命者に警告した。<sup>(24)</sup> ツヴェターエヴァにとって、祖国の生活もまた、よもぎの味がする。それは、亡命地のよもぎより一段とにがい。

よもぎの味のするこの「非生活」から生まれた詩は、はじめなほど少ない。<sup>(25)</sup> わずかな詩は、ちょうど魚が狭い穴から抜け出ようとあがいて、落とした数片の鱗に似ている。それはそのような動きがあったことの、詩人でありつづけようとしたことの証しである。しかし、魚は、穴から出られず、そこに<sup>とど</sup>澱むだけである。政治の石がつくりだしたすきまで、「非生活」の穴で、詩のかわりに、自分の運命について雑記帳に記すだけである。

うたうたいは うたうたえと きみ云えど 口おもく うたうたえず。うたうたいが うた  
うたわざれば 死つるよりほか すべなからんや。魚のごと あはあほと 生きるこそ 悲  
しけれ。<sup>(26)</sup>

二十三才十一ヵ月で戦死した竹内浩三は、軍隊で歌も詩もうばわれ、この詩をつくった。これは、軍隊から友人へはがきで送られた。この作品は、まるでツヴェターエヴァの心を代弁しているかのようにひびく。

亡命地では、異国のにがいパンを食べながらも、詩が生まれた。息たえだえではあっても、詩人でありつづけた。祖国では、彼女にとっては、詩人であることが至難のわざになる。

1940年アフマートヴァは、十五年ぶりに詩を印刷する許可をもらった。彼女は、過去にだした詩集から抜粋して一冊の詩集をだした。新作の詩集ではないので、それは、『六冊の本から』と名づけられた。アフマートヴァにとって、これは十七年ぶりの出版であった。

ツヴェターエヴァはこの詩集を読む。

「古くさい、まずい。」<sup>(27)</sup>

かつて尊敬し、夢中になっていた詩人が、今では色あせている。

「すばらしい語句があったのに……。とりかえしのつかない空白の頁……。1917年から1940年まで彼女は何をしていたのか。自分の中にとじこもっていたのだ。この本は、とりかえしのつかない空白の頁だ……。残念だ。」<sup>(28)</sup>

ツヴェターエヴァは、自分自身が空白への恐れをいだきながら、アフマートヴァの旧作を読んだ。彼女は、この詩集の外側にあるもの、原稿にすらできない詩群が記憶のなかに保存されていることなど、想像もできない。「空白」が「沈黙」であり、「沈黙」が禁断の詩を作ることであり、ツヴェターエヴァが娘をとられたようにアフマートヴァは息子をうばわれながら、現に苦しんでいる「私の民衆」へいつの日にか詩をとどけるために、「空白」の擬態をして待機していることなど、知りようがない。

アフマートヴァは、未来とかかわっている。首吊り用の「鉤」を物色しているツヴェターエヴァ

には、今の自分を詩作によって未来と結びつけることはできない。

アフマートヴァを過去のものとして脇にやり、ツヴェターエヴァは、「自分の仕事」にとりかかる。それは、翻訳であり、詩集の準備である。アフマートヴァに投げつけた「とりかえしのつかない空白の頁」が自分のソヴェトでの生活にあてはまるようなはめにならないためには、せめて旧作の出版によってでも詩人としてふみとどまらなければならない。

「1940年10月24日。本を編集している、付け加え、点検し、清書代を払い、再び訂正する。まずだめだろうと思う。もし出版を引き受けてくれたら、不思議なくらいだ。私はやるべきことはやった、完全に自発性を発揮した（いうことをきいた）。いい詩で、誰かに必要なものだ（ひょっとしたら——パンのようにすら）ということは分かっている。本は出ないだろう。翻訳をしよう。なぜあなたは書かないのか、と云う連中の口をふさいでやる。時間は一つ、それも少ない、手帳に自分の作品を書くのはぜいたくなことなのだから。翻訳は金になるが、自分の書いたものはそうではないから。少なくとも努力だけはした。」<sup>29</sup>

ツヴェターエヴァは、カルムイクの叙事詩『ジャンガル』をフランス語に訳していた。このため彼女は、『ジャンガル』の露訳者セミヨーン・リープキンに会った。ツヴェターエヴァは、自分の詩集にたいするコルネーリイ・ゼリンスキイの評価を、リープキンに見せた。これは、出版するかどうかを決めるための事前の書評である。ツヴェターエヴァの詩には政治的に有害なものはないが、ソヴェトの詩は、はるかに前進しており、彼女の詩的試みは、とっくの前に通りすぎた段階のものであり、時代錯誤であると読者にはおもわれるだろう、したがって、出版する必要はない、と書かれていた。<sup>30</sup>

リープキンは、このことをヴァシーリイ・グロースマンに伝えた。自らも作家としてひどく苦しむことになるグロースマンは、すぐに反応した。

「ツヴェターエヴァとアフマートヴァの運命は、ヴォルコンスカヤ公爵夫人の運命よりもつらいものだと思う。まさに彼女たちのような人びとについてこそ『ロシヤの女たち』という物語詩を書かなければね。君、書かないか、どうだい。」<sup>31</sup>

専制政治に反旗をひるがえしたデカブリストたちは、ほとんどが流刑になった。妻たちは、流刑地におもむき、囚人の夫と運命を共にした。その代表的な例であるヴォルコンスカヤ公爵夫人よりも、ツヴェターエヴァとアフマートヴァの方がもっと苦しんでいる、とグロースマンはいう。

亡命地から持ち帰った詩を時代おくれと決めつけられたツヴェターエヴァには、翻訳だけがあたえられた。にらまれ、うとまれている詩人の常である。しかも、彼女は、たんなる過去の詩人ではなく、「人民の敵」の母親であり、妻である。娘は、収容所にいる。夫は、獄中にどうやら生きているようであった。差し入れの品が受理されたからである。



3

1941年6月22日ドイツ軍はソヴェト領内になだれこんだ。

ツヴェターエヴァと息子は、疎開計画にしたがってモスクワをはなれ、8月21日タタル自治共和国のエラーブガ市についた。エラーブガは、カーマ河のほとりにある小さな田舎の町である。少しの砂糖と一にぎりの穀物を持参した難民である元詩人は、「著述・翻訳家」として登録された。<sup>(32)</sup> 話し相手もない僻地に恐れをなしたツヴェターエヴァは、モスクワの作家たちが疎開していたチストーポリへ移りたかった。彼女は、居住許可をもらい、仕事の口をさがすために、チストーポリに出かけた。

アフマトヴァの詩の記憶係であったチウコーフスカヤが、ぐうぜんチストーポリに疎開していた。ツヴェターエヴァは彼女に云った。

「以前は詩を書くことができましたが、今はもうできなくなりました。」<sup>(33)</sup>

詩を書けなくされた、詩を書けなくなった詩人に何ができるか。

「皿を洗うこと——これならまだできます。」<sup>(34)</sup>

亡命地でも帰国後も、ツヴェターエヴァは、日常の雑用が時間と力をうばいとり、詩を書くための余力と余裕を確保するのに苦勞した。今、このせめぎあい最終的に勝負がついた。天秤の一方は地につき、他方は上へはね上った。

文学財団が疎開した作家のためにチストーポリに食堂を開くことになった。ツヴェターエヴァは、願書をだす。

文学財団評議会殿

文学財団の開店予定の食堂に皿洗い  
として雇って下さるようお願いします。

マ・ツヴェターエヴァ

1941年8月26日<sup>(35)</sup>

チストーポリの疎開者会議は、ツヴェターエヴァの受いれを賛成多数で決定した。居住が許されたのである。食堂の皿洗いには希望者が多いが、できるだけツヴェターエヴァを採用するように努力するという口約束ももらった。元亡命者のよそ者にとっては、これは、上首尾である。彼女は、もしチストーポリに住むことが許されないなら、「カーマ河に身を投げる」<sup>(36)</sup> といっていた。

うまくいったとチウコーフスカヤは、喜んだ。ツヴェターエヴァは、喜ばない。当面の最低限度の生存条件が保障される可能性がみえてきたとき、彼女には、生きることそのものが無意味におもわれてきた。生きるに値しないというツヴェターエヴァに、チウコーフスカヤは答える。

「生きるに値するかしないか——このことについては、とっくの前からもう考えないことにしています。夫は、37年に逮捕され、38年には銃殺されました。私は、全く生きるに値しません。いずれにせよ、どのようにして、どこで生きようが、同じことです。しかし、私には

娘がいます。」<sup>(37)</sup>

ツヴェターエヴァには、子供はもはや切札にはならなかった。

「すべてが終わった、ということが分からないの？あなたにとっても、あなたの娘にとっても、  
そして一般的にも。」<sup>(38)</sup>

ツヴェターエヴァは、未来に生きる場を見つけることはできなかった。無意味で、恐ろしく、生きるに値しない未来を前にしては、皿洗いに雇われるかもしれないという幸運も、息子の存在も、もはや意味がない。ナチス・ドイツ軍は、ソヴェト領内を驀進し、都市は次々と落ち、赤軍は後退していく。かつての亡命地チエコスロヴァキヤもフランスもドイツに占領されている。残された最後の生存の場ロシヤも無くなるだろうとツヴェターエヴァは思った。

未来という道が無くなると、現在という場は断崖になる。

ツヴェターエヴァは、エラブガにもどり、8月31日、さがし求めていた「鉤」を見つけた。「鉤」はどこにでもある。その代用品はいたるところにある。彼女は、「鉤」をさがしあてたというよりも、むしろその時を見つけたのである。

日曜日だった。息子は勤労奉仕に出かけている。ツヴェターエヴァは、借りている田舎家の梁に縄をかけて、首をつった。48年11ヵ月の生涯であった。これは、人生の夏の終わりにあたる。詩人は、とり入れの秋を前にして、人生から去った。

息子がいるからアフマートヴァは死ぬはずがない、と娘アリアードナはいった。これは、あたったが、自分の母親にはあてはまらなかった。

残された息子ゲオルギイは、十六才であった。ツヴェターエヴァは、ボリス・パステルナークを敬愛するあまり、男の子を生んで、ボリスと名づけ、詩人の分身として持ちたいと願っていた。息子は夫の主張で、ゲオルギイと名づけられたが、亡命地で苦勞して育てた秘蔵っ子である。彼女は、1932年『息子への詩』を書く。私はお前の中へロシヤ全部をまるでポンプのようにそそぎこんだので

お前はなるまい

自分の国の廃棄物には<sup>(39)</sup>

と、うけあった。

ゲオルギイは、今、「心と運命」しか持たない詩人の「廃棄物」になった。詩人の「運命」を分担させられたゲオルギイは、母の死後、二年十ヵ月ほどしか生きなかった。タシケントの学校に入ったあと、モスクワの文学大学に学び、1944年7月白ロシヤで戦死した。十九才で死んだゲオルギイには、子供時代も青春も、「にがいよもぎを噛みつくす」晩年にすぎなかった。

セルゲイは、1941年8月に銃殺された。

こうして、アリアードナは、受刑中に家族を皆うしなう。一家の死は多様である。父——処刑、母——自殺、弟——戦死。

1939年から1947年まで収容所で八年の刑期をつとめたあと、アリアードナは、リヤザーニの工芸

学校に就職する。母親の墓まいりにエラブガに行きたいと思いつつも、安月給のためはたせない。人員整理で、あるいはそれを口実に、首になり、1949年2月ふたたび逮捕される。アフマトヴァの息子レフは、この年の11月に三たび逮捕される。この年は、元の囚人たちが一せいに検挙され、収容所や流刑地で再服役させられた。この年は、また、スターリン生誕七十年の祝いが国家的行事としておこなわれ、「刑吏人形」の神格化が頂点に達した。

アリアードナは、トウルウハンスク村へ終身流刑の判決をうける。トウルウハン地方へは、革命前にスターリンも流された。九月の半ばに初雪がふり、真冬には零下五十度になる寒村での流人生活をなぐさめるため、パステルナークは、手紙を書き、しばしば送金する。家族を失った中年の孤児は、極貧、極寒、僻地、孤独のなかで発狂せずに流刑に耐える。パステルナークの手紙と送金と送本がアリアードナをささえた。私信が検閲される状況のなかで、流刑中の「人民の敵」にはげましの手紙をおくりつづけるのは、勇気のいる、そして、美しい行為である。パステルナークの恋人イヴインスカヤも逮捕され、収容所へおくられる。おそらく詩人の身代わり、人質としてとられたイヴインスカヤを、二人は、検閲をおもんばかって、「私の悲しみ」「あなたの悲しみ」と暗号で呼びあった。<sup>(40)</sup> アリアードナもまたツヴェターエヴァの「悲しみ」であった。

犠牲者としての生涯でアリアードナは一つの幸運にありついた。「スターリン批判」によって大量の囚人が釈放される数年前に、彼女は、「犯罪構成要件なし」との理由で終身流刑から解放された。これは、スターリン死後二年目の1955年である。

アリアードナは、詩の翻訳家になる。釈放から死までの二十年間、彼女は詩人としての母親のために働く。ツヴェターエヴァの詩集を編集し、注釈し、彼女の原稿や手紙を集めた。

アリアードナは、1975年に死んだ。死後、母親の文書類は、国立中央文芸文書館におさめられた。この文書は、彼女の遺言により2000年まで閲覧を許されない。

ツヴェターエヴァがカーマ河のほとりに埋められた1941年9月、アフマトヴァは、疎開計画に従ってレニングラードをはなれた。疎開地は、中央アジアの中心地タシケントである。道中、彼女は、チストーポリに立ち寄り、チウコーフスカヤに再会した。ツヴェターエヴァが、もう詩を書けなくなったといいながら歩いたカーマ河の岸辺を、二人は散歩した。

娘と夫を獄に残し、息子を僻地の寒村におき去りにして自決したツヴェターエヴァとは対照的に、アフマトヴァは、生きて、囚人について詩をかく。旅の途中カーマ河が眼前にあらわれたとき、彼女は、そこにつづく道が単なる街道ではないと歌う。

すでに私のま前に  
カーマ河が永り凍つき  
「クオ・ヴァデイス」と誰かが云った  
口をきくまもあらばこそ  
トンネルと橋で

狂気のウラルがひびきをたてた。  
 私の前にあの道が開けた  
 あのように多くの人が去り  
 息子が連れていかれた道が。  
 おごそかで水晶のような  
 シベリヤの大地の静けさのなかで  
 葬らしいの道は長かった。<sup>(41)</sup>

4

「マリーナ・ツヴェターエヴァは、一生のあいだ詩作によって日常性から身を隠してきた。これが許されないぜいたくであり、魅惑的な情熱を息子のために一時的に犠牲にして、さめた目でまわりを見わたさなければならぬと思われたとき、彼女は、創作を通して出てくるのではない、どんよりした、見なれない、よどんだ混沌を見た。おどろいて後ずさりし、恐怖で身のおき所がないままに、死の中へ大急ぎで隠れこんだ。まるで枕の下へ頭を隠すかのように、首吊りの輪のなかへ頭をつっこんだのである。」<sup>(42)</sup>

枕で頭をおおえば、厭なものも見えず、恐ろしい音も聞こえない。ツヴェターエヴァにとって詩のない「日常性」からのがれて頭を隠せる枕は、死であったと、パステルナークはいう。しかし、息子のために詩を脇にやったら、得体の知れない「混沌」とむきあうことになったという説明は、ツヴェターエヴァには、あてはまらない。詩作のおかげで「日常性」を見なくてすむという「ぜいたく」が彼女に許されたことがあったとしたら、それは、「同時代」の政治が一家をわしづかみにするまでの時期である。次女の餓死から自殺までの二十年間、彼女は、詩作のための余力と余裕を確保するため、まさに「日常性」を相手に格闘する。くらしむき、世帯の維持に主力がいき、詩にはほんの余力がまわされるだけの状況を、彼女は、<sup>ルーカビシ</sup>原稿はぜいたくだと表現した。主客が転倒していた。詩を喰らってしまう「日常性」との闘いの過程そのものが彼女の日常性であった。ソヴェトに帰国してやむをえず詩をすてたら、恐ろしい現実と対面したのではない。

ツヴェターエヴァは、「ノートではあのように献身的に自分に仕かえ、実生活ではあのように自分をだめにしていく頭」<sup>(43)</sup>を持っていた。「実生活」つまり「日常性」とは、十月革命直後の混乱と飢餓、十七年間の亡命、スターリン時代の二年間がつくりだしたものである。この状況のなかで生活は、くらしだけになってしまう。娘と夫の逮捕のあとでは、「非生活」になる。詩人の「頭」には、それに対して罪もなければ、それを打開する力もない。

ツヴェターエヴァは、平たく横たわる海が嫌いで、高くそびえる山が好きである。彼女にとって詩人は、高い山よりもさらに高い所にいるはずであった。

詩人ハ——言葉オ遠クカラ連レテ来ル。

詩人オ——言葉ハ遠クヘ連レテイク。<sup>(44)</sup>

そして詩人とは

皆ガ

乗り遅レル汽車……

——ナゼナラ彗星ノ道ガ——

詩人ノ道ダカラ。<sup>(45)</sup>

ツヴェターエヴァは、皆と同じように汽車に乗り遅れ、詩人でなくなる。亡命地では不用の人間であり、ソヴェトでは人間として詩人として成り立たないと正確に判断していたツヴェターエヴァは、自分が追いつめられていくこと、夫や娘に死の危険がせまっていること、まさにこのことを詩にすることによって、自分の生を確保できなかった。しかし、この点でアフマートヴァとくらべて、ツヴェターエヴァを非難するのは、おろかである。彼女は、ナチズムがロシアの未来をうばってしまうと確信していた。それは、彼女にとって全ての終わりと同じであり、もはや詩は無意味になった。彼女は、政治を嫌い、政治から疎遠であらうとし、政治によって生活を強引に変えさせられ、とどのつまりは餌食になった。

その一生は、非政治的人間の政治的生涯である。

ツヴェターエヴァは、ボオドレールの命日に命を絶った。日は同じだが、ボオドレールは、母の手の中で死に、ツヴェターエヴァは、縄の輪の中で死んだ。ボオドレールは、詩人をアホウドリにたとえた。この鳥は、天空では王者だが、地上にひきおろされると、翼が歩く邪魔になる。アホウドリにとって、飛ぶことが生きることであり、歩かされることは「非生活」である。

亡命地で詩人でありつづけることに疲れたツヴェターエヴァは、自分をもはや尾羽打ち枯らしたアホウドリにすら例えなかった。

「ボオドレールでは詩人はアホウドリです。私はどんなアホウドリなのでしょう。寒さでこごえている、みじめな小鳥にすぎません。偶然にこのよそよそしい、恐ろしい地にまよいこんだ、あの世の霊だといったらびったりです。」<sup>(46)</sup>

アリアードナは流刑地のくらしが人間存在を喰いつくす、とパステルナークに訴えた。<sup>(47)</sup> くらしは生活の一部である。この一部が全部にとってかわろうとする。そのさい、人間は自分自身のための生命維持装置になってしまう。ただ日常の最低限度の生命活動を支えるための雑事が、最大の課題になり、ついには、それが全てになる。政治が強制したくらしむきが、流刑地のアリアードナに、人間であることを脅かす。

ツヴェターエヴァは、囚人にも流刑人にもならなかったが、「同時代」の政治が詩人であることを脅かしていった。これは、詩人にとって、人間であることを根底から脅かされることであった。

ツヴェターエヴァは、やはり、アホウドリに似ていた。

アホウドリは、生けどりにされ、甲板におろされると、

翼あるこの旅人の なんとぶざまな意気地なさ。

今まで美しかったのに、滑稽極まる醜い姿。

短い<sup>キセル</sup>烟管で 嘴を 一人の水夫は 突っ突くし、  
<sup>アマガケ</sup>天翔る身の成れの果の<sup>ビツコ</sup>跛を 真似するものもいる。

この<sup>ウンシヨウ</sup>雲霄の王侯に 詩人は似ている。

<sup>アラシ</sup>暴風雨の中を往来し 射手を嗤つてはいるが、

地上の嘲罵のただ中に <sup>オイヤ</sup>追放られると

巨人の翼は 歩くのを 邪魔するだけだ。<sup>(18)</sup>

政治という水夫によって生けどりされ、天空という詩人の場をうばわれ、甲板というくらしの上にすえられ、慣れない場所を不器用なままに歩かされると、詩人の「頭」と詩神の翼は、ただ邪魔になるだけ。だから、詩人鳥を殺すには、地上を歩かせるだけでいい。

ツヴェターエヴァは、才気あふれる詩によって「彗星の道」を往来したことがある。

かつての彗星は、流星となって「同時代」のなかで消滅した。

(連作第六部おわり)

1986年

## 註

(1) Марина Цветаева, Непзданные письма, YMCA-PRESS, Paris, 1972, стр. 23.

以下の引用にあたっては、書簡集とのみ記す。

(2) 書簡集 23頁

(3) 同 25頁

(4) 同 42頁

(5) 同 120頁

(6) 同 109頁

(7) 同 377頁

(8) Мне голос был.

(9) Не с теми я, кто бросил землю

(10) 書簡集 503頁

(11) Анна Ахматова, Сочинения, YMCA-PRESS, Paris, 1983, т. 3, стр. 94.

(12) 書簡集 415-416頁

(13) Марина Цветаева, Стихотворения и поэмы, Russica Publishers, New York, 1983, т. 3, стр. 203.

以下の引用ではСПとのみ記す。

(14) セルゲイは、トロッキイの息子の暗殺に加担したという説もあるが、正確なことは今のところ分からない。

(15) 書簡集 630頁

- (16) 同 77頁
- (17) 同 630頁
- (18) 10月10日という日付は、チウコーフスカヤによる（СП，415頁）。彼女は、これをチストーボリで直接ツヴェターエヴァから聞いたのだろうか。
- (19) 書簡集 608頁
- (20) 同 610頁
- (21) 同 613頁
- (22) 同上
- (23) 同 631頁
- (24) Анна Ахматова, Стихотворения и поэмы, Библиотека поэта, Большая серия, Л., "Советский писатель. Ленинградское отделение", 1977, стр. 152. 以下の引用では БП とのみ記す。
- (25) ツヴェターエヴァは、ソヴェトでは全く詩を作らなかったとも云われていたが、雑誌『ネヴァ』の1982年第4号に1940年～1941年の詩が発表された。СП，211～213頁にもっている。1983年カザニで発行されたツヴェターエヴァの選集にも入っている。なお、この点に関しては、次のものを参照。  
Вестник русского христианского движения, Париж-Нью Йорк-Москва, 1983, №138, стр. 282-286.
- (26) 竹内浩三全集 I, 新評論, 1984年, 90頁
- (27) 書簡集 631頁
- (28) 同 631～632頁
- (29)
- (30) Семен Липкин, Сталинград Василия Гроссмана, Ardis, Ann Arbor, 1986, стр. 95.  
リープキンがツヴェターエヴァに会ったのは、1940年11月又は12月。ゼリンスキイの書評は、1940年11月19日付（сп，424頁）。出版されなかった詩集の収録予定作品の一覧表が сп，425～428頁にのっている。
- (31) Сталинград Василия Гроссмана, стр. 95.  
『ロシヤの女たち』は、日本では『デカプリストの妻』という訳名で知られている。
- (32) 書簡集 636頁
- (33) СП，406頁
- (34) 同上
- (35) СП，416頁
- (36) 同 402頁
- (37) 同 404頁
- (38) 同上
- (39) 同 164頁
- (40) Письма из ссылки / 1948-1957 / , А. Эфрон Б. Пастернаку, YMCA-PRESS, Paris, 1982.
- (41) БП, стр. 377.
- (42) Борис Пастернак, Избранное, М., "Художественная литература", 1985, т. 2, стр. 260.
- (43) 書簡集 630頁
- (44) СП，67頁
- (45) 同上
- (46) СП，353頁
- (47) Письма из ссылки, стр. 120.
- (48) ボオドレール, 鈴木信太郎訳, 『悪の華』, 岩波文庫, 33頁

## 補注

ツヴェターエヴァがチストーポリでフエージンに助力を求めたら、断られ、これが自殺の一つの原因であるという説がかなりひろまっている。これは誤りである。フエージンは、チストーポリへむけて1941年10月14日モスクワを立った。(Вопросы литературы, 1986, №7, стр. 222.)。ツヴェターエヴァの自殺後である。